

学術基礎英語（前期・集中講義）授業報告書

ゲストスピーカー

関口 正也

奈良女子大学大学院で実施されている「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の一環として「学術基礎英語」の授業のゲストスピーカーを二週にわたって勤めた。以下では当該授業について報告する。

1. 授業概要

本授業は、学生が英語をツールとして使用し、自らの考えや研究成果を表現できるようになることを志向し、そのために必要な学術英語の基礎を習得することを目的として実施された。授業の概要は表1に示すとおりである。

表1：授業概要

開設科目名	学術基礎英語（集中講義）
主担当	増井正哉教授（ゲストスピーカー：関口正也）
対象	博士課程前期学生（国際社会文化学、人間行動科学、人間環境学） 32名出席（1回生31名、2回生1名）（履修登録34名）
開講期	前期：7月1日（土）、7月8日（土）の2回（各6時間程度）
授業方法	講義、個人演習、グループワーク、グループ発表とディスカッション
授業の概要	学術交流、調査研究、研究発表で必要とされる実践的な英語活用能力の向上を目的とし、そのための各種スキルを講義と演習を通じて習得する。
学習・教育目標	学術英語の基礎を理解し、英語で学術企画・成果の表現をできるようになる
成果	受講生は英文で論文概要を書くことができる。 受講生は英語で学術成果・研究企画のプレゼンテーションをできる。
講義の特色	完璧な英文を書くことを目指すのではなく（それは英文チェックをネイティブに依頼すれば可能）、英語を道具として使い、国際人として如何に自分の考え方を的確に表現し、伝えるかに主眼を置く。
授業計画	<u>1週目（7月1日）</u> 英語による自己紹介 なぜ学術英語を学ぶのか 良い英文ライティング・プレゼンテーションとは何か 個人演習1 英文のルール・書き方1 プレゼンテーション準備（演習：グループワーク） <u>2週目（7月8日）</u> 個人演習1の講評 英文のルール・書き方2 各グループによるプレゼンテーションとディスカッション 個人演習2

2. 授業の講評

授業では講師からの一方的な講義だけではなく、小グループによる議論や学生によるプレゼンテーションなど、学生が主体的に考え、自ら学ぶことを重視した。

はじめにアイスブレイクとして学生による英語での自己紹介を行った。名前、学部、研究分野、出身地、出身地の自慢を各自英語で話した。出身地の自慢を含めたのは、日本人は控えめで、外国人が集まる中では無口になる傾向があるため、自慢話をするのを促し、自己主張をするという視点を持って欲しかったからである。予想通り自分の学部や選考を話す時点で躓く学生が多かった。しかし、下手でも良いからとにかく喋るという雰囲気があったことから、全員一通り話すことができた。また、今回の受講生の三分の一程度は英語でのコミュニケーションができるレベルにあると観察された。

自己紹介の後、学生を四つのグループに分けた。分けた基準は出身地と自己紹介時の英語のレベルである。各グループの英語のレベルが均等になることと、学部が分かれるようにした。これは、普段交流のない学部の学生が共同作業をすることにより普段とは異なるアイデアの交流ができればと考えたためである。

最初のグループワークは「なぜ学術英語を学ぶのか」ということについて議論してもらった。これは、学生自らがなぜ自分達がこの授業を履修しているのか、そしてこの授業を通して何を学ぶべきなのかということを中心に考えてもらうためである。表2にはグループ毎の議論の結果をまとめた。

表2：なぜ学術英語を学ぶのか

グループA	便利（国際言語として） コミュニケーション、手段 資料を読む ホームページを読む 学会、議論
グループB	外国の人に意見を伝える 論文の要約を書く 英語で研究内容を喋って自信をつける
グループC	論文を読む 論文概要を英語で書く 学会発表、ワークショップ参加、議論 他人の意見がわかる
グループD	国際発表 意見交換 英語をつかうことで新しい発想 海外で専攻分野を知る

各グループから出てきた意見は、講師が事前に用意していたものをほぼカバーしていた。この作業を通じて、学生はなぜ学ぶのかということについて、自分の意見だけでなく他の

学生の意見や講師の意見を含め多様な考えがあることを知ることができた。

つづいて、良い英語論文やプレゼンテーションとは何かという議題について議論した。結果は表3に示すとおりである。

表3：良い論文・プレゼンテーションとは

グループA	専門用語を使いすぎない 要点がまとまっている、見やすい 笑顔で相手を見つつ語る
グループB	大きな声、時間を守る 目を見て、非言語コミュニケーション 聴き手の反応を見ながら 言いたいことをはっきりさせておく 判りやすいタイトル つかみが大切
グループC	目的、方法、結論がはっきりしている 簡潔に明確に 大きい声でハキハキと 資料を入れて視覚的に 伝えるという前向きな気持ち
グループD	言いたいことが明確に 資料が適当 見やすく判りやすく、適当、読みやすい 発表者が冷静かつ情熱的 聴く人の立場に立った発表計画

様々な意見が出てきたが、共通していたのは、論旨が明確であることと論文なり発表がアトラクティブであるということであり、的を射たものであった。その後、良い論文、良いプレゼンテーションについて講義を行い、読み手や聴衆のことを考えた論文・プレゼンテーションについて補足した。

個人演習

初回の午前中の最後に40分ほど時間を取り、個人演習を行った。課題は卒業論文などこれまでに書いた論文の要約を100～200字程度でまとめるというものである。時間は40分程度。これは、本格的に学術英語の講義をはじめる前に、学生のレベルと英文の特色を把握することが目的であった。結果は翌週の第二回目の授業の中で講評した。共通して見られた傾向として以下のことがあげられる。

- 論文執筆に際して実施した事実を並べただけの日記のような文章が散見された
- 論文のテーマについて研究の意義が説明されていない
- 論文全体の構成（アウトラインや主要議題）について触れていない
- 研究の必要性・重要性に関わる説明が不十分
- 文章のスタイルや語彙が口語調

➤ 文章の発想が日本語的

講評においては、全体的な傾向について説明するとともに、学生の書いた文章の事例も引用しながら適切な表現について学術英語という観点から講義した。

英語でのプレゼンテーション

今回の授業の重要課題として学生グループによる英語でのプレゼンテーションを行った。初回授業で4つのグループ毎に発表する課題を決めてもらい、次週の授業までに各グループでプレゼンテーションをパワーポイントで準備し英語で発表してもらうという形式である。テーマは講師がアフガニスタンで仕事をしているということもあり、「アフガニスタンの女性と開発 (Afghan women in development)」とした。アフガニスタンにおける女性の状況や復興開発について写真を含め概説し、具体的なグループ課題について説明した。各グループではこのテーマに沿って具体的にどんなトピックで発表するかをはじめに議論してもらい、表4の発表トピックが選定された。



表4：プレゼンテーション（アフガニスタンの女性と開発）

グループA	暴力 (“I can’t stand violence against women”)
グループB	若年結婚 (The evils how child marriage gives it to and their remedy)
グループC	ファッションと職業 (Proposing the rise of Afghan woman’s working rate: Proposal about woman’s advance to post of tailor)
グループD	出産 (Birth and maternal mortality rate in Afghanistan)

翌週、学生グループによる英語でのプレゼンテーション発表がなされた。各グループ10枚程度のスライド（英語）を英語で発表した（発表のハンドアウトは別添を参照）。ただ、発表に対する質疑応答・ディスカッションについては、学生の会話能力を勘案し、日本語で行われた。プレゼンテーションは全体的には時間、発表ボリュームなどは事前に指定していた範囲内で行われた。発表の方法につ



いては学生の自主性に任せたため、メンバー全員でトピック毎に発表するグループや、グループ内で役割分担するグループなど様々であった。プレゼンテーションのスライドについては、事前の講義（論理的な構成の仕方など）で得たものも反映されており、見た目も配慮されており、専門外の領域を扱った発表としては良く出来ていたと思われる。ただし、質疑応答やディスカッションにおいて発言が少なかったことは、英語での発表であったため、発表者以外のグループの学生が発表の意味をよく理解できていなかったということに加え、議論・討論するということに慣れていないのではないかとすることも推察された。なお、共通して見られた傾向として以下のことがあげられる。

- 発表のときにスクリーンやメモを見ていて聴衆を見ていない
- スライドやトピックを変える際にそのガイドをしていない
- メモやスライドの文章を棒読みしている
- 発表は口語で、スライドは文語で要点のみということが徹底されていない
- はじめに発表のコンテンツを示すという構成が徹底されていない（2グループ）

なお、講師が授業で使ったハンドアウトや資料については別添を参照。

3. 学生の評価

学生による自己評価を図1に示す。理解度の段階は 1: 全く理解していない、2: 少しは理解できた、3: 概要については理解できた、4: 授業内容については大方理解できた、5: 人に教えることができる、となっている。全体の半数以上の学生が今回の集中講義についてある程度理解できたと感じていることが評価結果から伺える。

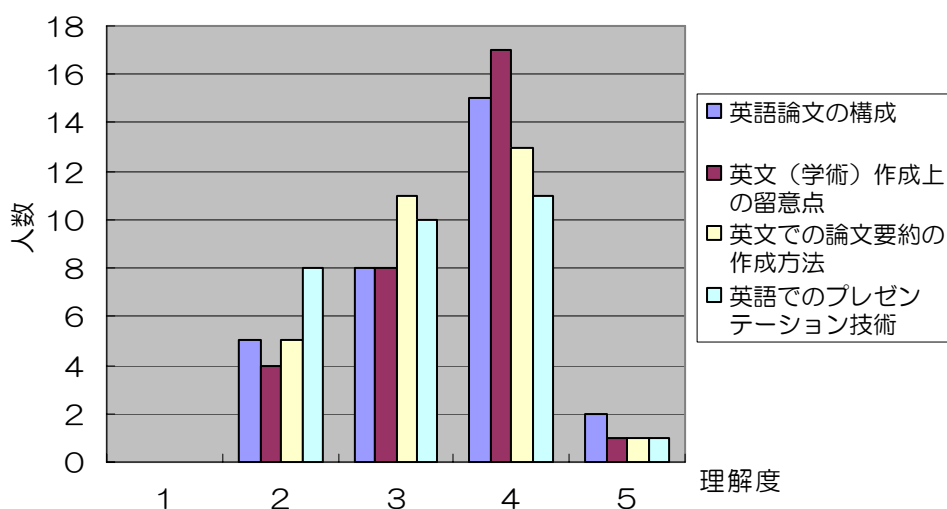


図1：学生の理解度

学生の成績評価については、グループワーク（プレゼンテーション）と個人課題（論文概要作成）によって行った。グループワークは20点満点で評価し、個人課題を80点満点とし、合計で100点満点となるようにした。グループワークの結果は以下の通りであった。

グループA	18点
グループB	15点
グループC	16点
グループD	17点

一方、個人課題（論文概要 300Words 以内）の採点結果は図2の通りであった。採点は80点満点で、その内訳は構成力30点、伝達力30点、語彙・文法など表現方法20点として評価した。一日目の個人課題に比較し、授業で学習したことを活かしたこと、提出までに1週間時間があったこともあってか、提出物のレベルは向上していた。採点においては、文法的なことよりも構成や伝達力を重視した。点数の目安としては、授業を通じて学習したことが活かされていれば60点以上は確保でき、とくに良くまとまっているものについては、70点以上を付けている。

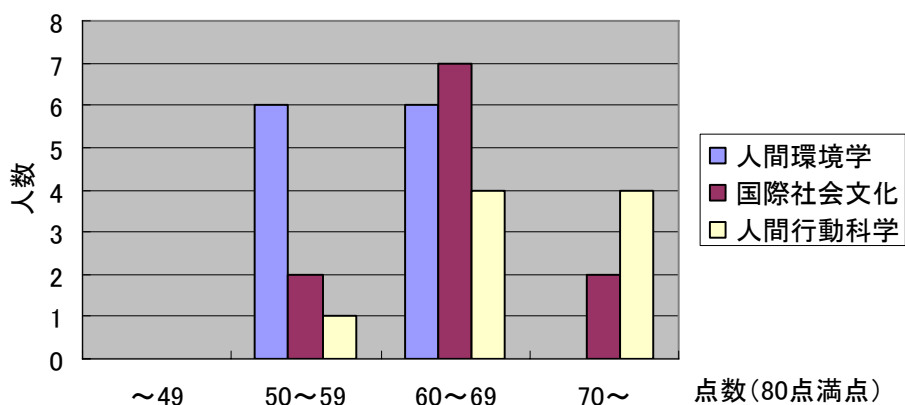


図2：個人課題の採点結果

結果を学部別に集計すると、人間行動学や国際社会文化の学生が比較的優秀な成績を収める傾向にあった。これは、これらの学部の学生は論文など文章で研究成果を表現する機会が人間環境学に比較し多いことも一因にあると考えられる。

なお、受講生の採点結果については別添を参照。

4. 授業の評価

今回の授業の評価と後期授業に向けてのフィードバックのため、学生への授業評価に関わるアンケートを行った。一つは講義内容・手法、もう一つは講師についてである。アンケートの中で比較的多く見られた学生からのコメントを良かった点、問題点・改善点に別けて表5にまとめた。

表5：学生による授業評価

良かった点	<ul style="list-style-type: none">・ 英語論文は日本語論文とは構成、表現方法など異なることが理解できた。・ 英文作成上の留意点を学べて良かった。・ 論文の構成を英語で考えることで論理的に考えられるようになった。日本語の論文でも参考にしたい。・ 学術英語だけでなくプレゼンテーション技術も学べて良かった。・ 論文（英語に限らず）を論理的に書くということでも勉強になった。・ グループ分けが他学部の学生と一緒にだったので意見交流などが新鮮で良かった。・ グループワークが楽しかった。・ 短期集中でポイントを押さえた授業でわかりやすかった。・ アフガニスタンの話など講師の実際の経験が聴けて良かった。・ 日本語主体で授業をしてもらい良かった。・ 課題を添削してもらえたのが良かった。・ プレゼンテーションの内容を考える際に良いアドバイスをしてくれた。・ 講義を演習と結びつけるという方法は面白い。
問題点・改善点	<ul style="list-style-type: none">・ グループディスカッションの時間をもっと取って欲しい。・ グループワーク期間が1週間しかなかったことは時間的に余裕がなかった。・ 他学部の学生と協働のグループワークは時間を合わせるのが困難であった。・ 他のグループの英語でのプレゼンテーションが聞き取れなかった。・ 学生のプレゼン時間が多く、講師の話をもっと聴きたかった。・ 課題が多く大変だった。提出課題を少なくして欲しい。

5. 課題と提言

学生へのアンケート結果にもあるように、二週連続講義はグループワークとして宿題をこなすには難しいようである。一方で、学部を交えたグループ分けは学部間の交流などポジティブな面もあるので有意義だと考えられる。このことから、後期の授業は第一週と第二週の間を二週間程度取ることが望ましいと思われる。

また、今回のワークショップ形式の授業運営では、適正人数は20名以下が妥当なように思

える。グループワークの適正人数は 5 名前後である。人数が多いとグループ数や各グループの人数が増え、議論の時間を減らさざるを得ないことになる。今回は受講生が前期に集中し、32 名が受講した。後期は受講生が減ることが予想されるため、もう少し肌理の細かい授業にできるかもしれない。

最後に、論文の構成や書き方などについて、知らない学生が多かった。英国では大学院生向けにノートを取り方、論文の書き方、図書館の利用方法や文献の検索方法などのオリエンテーションを行っているが、日本の大学ではこうしたことを教えない傾向にあるように思える。

授業を通じて、学生には十分に潜在能力があることが感じられた。基礎的な部分をしっかりと理解すれば、あとは各自で応用できるものと思われる。大学として学習法（日本の義務教育でも高等教育の中では教えられていない）を学生に教えることは、学生の能力をより発揮させるためにも有効であると思われる。